起つたことでなく、當時高識卓論第一流であつて文久二年の頃に既に「興天下爲公共之政」○小楠遺稿などと云はれて居たこと又政治論の基礎が孟子にあつたことなど○長岡雲海公傳引永田永孚氏談話が禍を爲して居るのではあるまいか。これと同じやうな例を明治二年九月三條木屋町に於ける大村益次郎の遭難の原因に就ても見ることが出來る。

日本と暹羅との貿易につきて

文學博士　新村出

予は史林大正十二年七月及び十三年一月號に於て日暹兩國の關係について史的觀察を試みた。それに由れば、暹羅の國使が日本に渡來したのは、嘉慶二年（元中五年）卽ち明の洪武二十一年にあたる、戊辰年、西紀一三八八年を最初とするが、それは高麗史に見えるだけであつて、國使には記錄がない。而も日本には留一年とある。暹使が將に亡びかけてゐた高麗の朝に來貢したのは、戊辰から三年後の辛未、元中八年（明德二年）すなはち明の洪武二十四年、西紀一三九一年のことであつた。かくて日本では南北が合一し、朝鮮では李朝が興つて後わづか數年して、暹使が再び入鮮したやうな事があつた。それは應永四年すなはち洪武三十年丁丑、李朝太祖の六年、西紀一三九四年のこと

であつた。暹羅船が琉球に航行したことの史に見えてゐるのでは、應永十一年（永樂二年）、西紀一四〇四年が最も古い。これは三山統一以前のことであるが、琉球の方からは、應永二十七年（永樂十八年）西紀一四二〇に至つて、中山王思紹（巴志の父）が使を遣はして暹羅と修交した。かやうに朝鮮や琉球との交通があつたのであるから、暹人が日本に渡來したことも察し得べきである。暹國と鮮琉兩土との關係が以上の如くなるは西暦十四世紀の末から十五世紀の初にかけての約三十年間にあたる明初である。百年後の十六世紀の初に葡萄牙人が、暹羅と腹背に接壤せるマラツカに來渡したとき、リケオス（琉球人）またゴーレス（高麗人）を見たといふ由來を考へれば、右の時代まで遡るわけである。

葡人が日本に漂來した天文十二年（嘉靖二十二年）西紀一五四三年のころ、卽ち凡そ十六世紀の中程に於ては、日本は既に暹國のことを知つて居たやうである。支那人や朝鮮人や琉球人によつて、それを聞いたと見られる。

東山時代すなはち西暦十五世紀の後半期ころより盛んになつた茶器の中には、南國系統の瓷器類もあるが、それらはみな直接の輸入によるものでなくして大抵支那朝鮮琉球からの間接の傳來であらう。後世スンコロク手と呼ぶ茶入の如きは、暹國メナム河の上流スワンカロクSwankalok（北緯十七度餘東經百度未滿）の地の土を以て宋の青磁を模造したものだといふことであるが、寛文四年茶書によるに、高麗出來なりとある。これらからも推察して、足利時代にも既に暹國の貨物が間接に渡來してゐたことが考へられると思ふ。

アントニオ・ガルヴアノ Antonio Galvano の新舊發見史に從へば、葡人が日本を發見するに至つたのは、暹羅國より出奔した三人の葡萄牙商買が

寧波へ向ふ海上難風に遭つて種ケ島に漂着したのに由來する。この書によれば其の年代は一五四二年卽ち天文十一年になるが、南浦文集の鐵炮記によつて其翌年とする方が眞に近いとされてゐる。日暹通交が鐵炮と結びつけられた奇しき因緣はこゝに起る。次にピントーの漂泊物語によつても、彼が日本來航に先だちて、暹羅の南邊パタニ（太泥）およびリゴル（六坤）邊を荒掠しまはつて寧波にも來たが、種子島に着くまでには前後支那の沿海諸地方を經歷したことになつてゐる。

葡人渡來以後六年にして、天文十八年（嘉靖二十八年）西紀一五四九年に至つて西敎の宣布が始まつた。その後十年を經て京都に天主敎の布敎を見るに及んだ。新刊獨譯本フロイスの日本史に由るに、一五六〇年（永祿三年）伴天連ヴィレラが京都に於て屢々幾多の僧侶に接したときの問答のうちに、釋迦が日本支那暹羅に於て尊崇されてゐるといふ文句また日本から支那へ、支那から暹羅へ、暹羅から印度へ、それぞれ何里あるか、といふ質問がみえてゐる。されば少くとも僧侶は、支那と印度との中間に暹羅の介存してゐるくらゐのことは心得てゐたと見ねばならない。日支暹相互間の里程を伴天連に問うたのは、大德寺の老僧であつたのである。

倭寇が江浙に熾であつた嘉靖三十年代のころ、卽ち西紀一五五〇年代に於て、日本にも渡り豐後に來た鄭舜功が、嘉靖四十三年（永祿七年）西紀一五六四年に編纂した日本一鑑窮河話海の卷二、器用附言土產の部を見ると、

手銃　初出佛郎機國之商人始敎。種島之夷所作也。次則棒津平戶豐後和泉等處通作之。其鐵既脆不可作。多市暹羅鐵作也

之に由ると、鐵炮傳來の後二十年を經て種子島より坊津や平戶や豐後、更に泉州堺にまで弘まつ

たことがわかり、南浦文集の補遺とも裏書ともなつてゐる。日本一鑑の珍寶部の鐵の條には、出豐後越中備中陸奥者佳、可爲刀、不可作銃、蓋鍊鐵也と見えてゐるので、日本の鐵が銃炮を造るに適せざることを知り、從つて暹羅の鐵を輸入するの要があつたことが明かになる。次に硝石に關して云く、硝、土產所無、近則竊市於中國、遠則興販於暹羅、とある。當時本草學未だ開けず國產の有無を明かにしがたいが、鄭氏の言によるときは、支那や暹羅に供給を仰いだものと見える。戰國時代にあつて重要なる兵器および火藥の原料を暹羅から得たことは興味ある事柄であるが、それが天文永祿の交より既に行はれたといふのは益々面白いと思ふ。

それよりも四十餘年後になるが、慶長十年柬埔寨國主より德川家康への獻上品に暹羅鳥銃二門およびその附屬品を贈つたことが、私の所藏にかゝる相國寺書翰屏風の模寫に見える。外蕃通書卷十八にも之を引用して右の國書を載せると共に、家康よりの謝狀をも擧げた。特に鳥銃等の贈物を歡ぶといふ意が表はしてある。異國往來と異國日記とに由つたのである。たゞ同年柬埔寨國よりの來信に代價を差出して良馬銅鐵刀銃等の物を買ひたき由を申出して來たに對して家康から逸馬銅鐵刀銃等の土宜求むる所に隨ふべしと返書してゐる所から察し、又慶長十五年家康より同國への贈與に鐵炮三十挺とある（外蕃通書十九）所からみると、日本から鐵砲を送出したこともあつたのである。但し暹羅製のは格段優れてゐたと見え、柬國から暹銃をもらつた翌年、慶長十一年西紀一六〇六に家康は暹羅國王に書を送り、宴人於貴國所依賴者上々奇楠香極品鐵炮也と懇望してゐる。慶長十五年家康よりの書翰および本多上野介正純よりの添書にも、來歲の船にて鐵炮と鹽硝との投惠を依賴

し、暹王よりの進献目錄に鐵炮五十柄と出てゐるのなどから考へると、暹銃はよほど勝れてゐたに違ひなく、半世紀以前の日本一鑑の記載と符節を合はすことを發見する。暹國から銃五十柄を得た同年に鉋三十挺を東國に與へてゐるのなども極めて妙な振舞に見える。私たちをしてその十數年後に起つた如き暹東兩國間の戰爭の既にその頃にも在つたのではないかと想はしめるほどである。

暹羅より鐵炮の進献は家康の死後にも及んでゐる。亦外蕃通書によるに、元和七年同國の有司より長崎奉行と本多上州とに宛てた書翰に、各献上品として鳥銃一對と記るし、飾發機處純用眞金と註した。元和九年の暹羅國王よりの書翰にも、嵌金鳥銃二門と見えてゐる。かくの如く天文永祿より慶長元和にかけて、暹國より新鋭武器の輸入贈進のあつたことは注意すべきことである。尙又元和七年山田長政より土井大炊頭利勝に鹽硝二百斤を贈つたことのある事柄も、前後相對照して考へると興味が深い。日暹貿易に關しては往年內田博士も研究を發表されたことがあつたが、一部分ながら私の調べた所は之に對して多少の增補がある。次に私見によると、日本に贈つた鐵炮は暹羅での製品ではなく、歐洲人が暹羅へ持渡つたものを、更に同國から再輸出したのであらうといふ內田氏の見解は一應尤であるけれども、私は必ずしもさうは考へない。東國よりの進物の中に特に暹羅鳥銃とことわつたりしてある所から見ても、暹國の特產と見る方がよいと思はれるのである。

暹國よりの輸入品には、內田氏の擧げられた貨物の外に、元祿八年刊行の華夷通商考卷下及び寶永五年刊行の增補華夷通商考卷三に見えた暹羅の土產を數へ得られるであらうし、ワレンタインの新舊東印度志中の暹羅志に記載する貿易品及び土產品をも見逃がすわけにゆかぬ。後者は今姑くこれを

おき、前者について二三の鶏肋を添へることにする。増補通商考所載の暹羅土産中、第一に注意されるのは、白焰硝である。これは日本一鑑や異國日記（元和七年山田長政書狀）の記載と呼應する。次に花布（サラサ）は、別に暹羅染といふ名で京都地方には知られてをり。また暹羅屋といふ家もこの地方に存したほど、暹國輸入の更紗がひゞいてゐた。文獻に最も古くあらはれたのは、寛永十五年に撰した松江重頼の毛吹草（巻三山城）であつて、紗羅染（シャムロ）とある。尤も刊行は少し後れて正保二年であり、その以後の重刊もある。享保の長崎夜話草の附録に、花莚の製造はもと暹羅人よりの傳來なりとあるが、増補通商考の方にも、暹國土産品中の花莚に註して、是に習つて長崎にて造るとある。但し二書共に同地の西川如見の著述であることは言ふまでもない。

紅土（ニッチ）、藤黄（シュオウ）、鬱金（ウコン）などの染料顔料の類も見える藤黄には、繪具シュヲウ（雌黄）のことゝ註してあるが、之に關しては本草家にして畫家を兼ねた平賀源内の名著物類品隲（巻二石部）の雌黄の條と、コヲルドの條とを參照すべきである。雌黄の條下には陶弘景を引用して扶南林邑に出ずる者之を崑崙黄と謂ひ色金の如く畫家の重んずる所なりとあり、コヲルドの條下には、和名シャムディ（暹羅泥）と云ひ、植物性の藤黄よりも優れることを述べてをる。次に鬱金（ウコン）は増補通商考に註してサプランと云、多くは染物に用るなり、又は唐人魚肉の料理に用るとあるが、これは和漢三才圖會（巻九十三芳草）に、古へは暹羅より多く來る故に今廣東南京福州より少しく來るも皆これを暹羅鬱金といふとある。この書は正德年間の著作刊行であるから、通商考増補本よりは少し後であるから、この物の輸入は寶永以後少し衰へたやうに見える。染料たる蘇木のことは著名であるからこゝには擧げない。

暹羅の鹿皮は有名であり、ワレンタインの志にも特筆してある。増補通商考にも鹿皮色々とあり、

別に犀皮牛皮虎皮蛇皮鮫皮などを擧げてある。本邦に暹羅革といふのは、主として鹿皮について云ふのであらう。元祿の萬寶全書また天明期の稻葉通龍の裝劒奇賞（卷六）および同く鮫皮精義（卷下）などを參照すべきである。

増補通商考には暹羅の土産に鷄を擧げ甚大なりと註してある。本邦にいはゆるシヤム、シヤモ又シヤムロドリもその中に屬するわけである。貝原益軒の大和本草や、寺島良安の和漢三才圖會には暹羅鷄とあるが、貞享四年の西鶴が男色大鑑卷八の第二に「別れにつらき沙室（しやむ）の鷄（にわとり）」と題して鬪鷄の話が出てゐる。嬉遊笑覽（卷十二上）にはこの事柄を明暦二年以前の事とした。それによるとシヤモの輸入も寛永ころにまで遡ることが出來る。

増補通商考には暹國の土産中に米を擧げ、「白米也皆日本の白大唐と同じ、船の足かためにに積來る者なり」と註した。暹羅米に關しては、太田蜀山が瓊浦又綴下卷に於て抄錄した寛文十二年の長崎の古記錄に由ても古く多額を輸入したことが推察される。通商考に、

人物、是等ノ國（暹羅柬埔寨太泥）ハ皆不斷裸ニテ腰ニ木綿島花布（サラサ）ノ類ヲ捲キ其餘端ヲ肩ニ掛ルヲ禮儀トス……一年ニ二度或ハ三度耕作スル故ニ米穀甚易ク乞丐者稀也ト云、

とある。支那の舊史古地誌に見えた所と大同小異であるが、染物といひ染料といひ米穀といひ、はた鐵炮といひ、暹羅からの輸入品は、貿易史上頗る重要であつたと信ずる。（大正十五年十一月三十日稿）

（註）フロイスの日本史、一五六〇年（永祿三年）記二ヶ所に於て京都の僧侶の語中に、日本支那暹羅三國のことありしを指摘せしが、今日新着の同書第二回分の配本によりて檢するに、一五六九年（永祿十二年）記に於ても日支暹の三國を併稱せることを亦二ヶ所に散見せり。朝山日乘上人との宗論に關する條下に出でたり。なほ早く一五五〇年（天文十九年）記にも、フランシスコ・シヤヴイエルが博多と山口とに至りしたりの僧侶の語中にも日本支那天竺の三國のこと見え、而も暹羅は天竺の別稱なることをフロイスは註せり。後年暹羅に渡航せし船夫德兵衛に天竺德兵衛の名を與へ、その物語に渡天物語の稱を附せし由來もこゝに存せりとなすべし。

なほフロイスの日本史、一五六三年（永祿六年）記を見るに、同年葡萄牙船二隻の外、暹羅の一大ジヤンクが、葡人を甲比丹として、西肥の横瀨浦に來航せしことあり。暹國の鐵材と硝石とを日本に輸入する由の記載ある日本一鑑の成りしは、實にその翌年（嘉靖四十三年甲子（西紀一五六四年）我が永祿七年の頃なりとす。（丙寅十二月一日補）